

一八八三年十二月十四日(金)

ドツキネーシヨル  
南神村における聖ラーマクリシユナと信者たち

ドツキネーシヨル  
南神村における聖ラーマクリシユナと信者たち

オグロハヨンの満月、この月最後の日である。キリスト暦一八八三年十二月十四日、金曜日。時間は九時ころ。タクール、聖ラーマクリシユナは自室の入口近くの南東側ベランダに立っていらつしやる。ラームラルがそばに立っている。ラカール、ラトウは近くをあちこちしていた。モニ(校長)が入ってきて、床に額めがずいてごあいさつ申し上げた。

タクールはおっしゃった。「来たかい? 今日はいいい日だよ」彼はタクールのところに数日泊まり込むつもりである。そして修行しゆぎんするつもりだ。この前、タクールはこうおっしゃったのだ——「もう少し進めば、誰かがコレだ、コレだ」と言ってくれるよ」と。

タクールは、「ここに滞在する場合は、寺の接待所の食事を毎日食べに行く必要はない。もともとあそこは、貧しい人のためにあるものだから、お前は自分の食事の用意をさせる人間を一人連れてくるとよい」とおっしゃったので、彼はそのために一人の男を連れてきた。

どこで料理をつくったらいいのだろう？ 牛乳も飲むし——。タクルルはラームラルルに、牛搾りにそう言つてモニのために毎日牛乳を届けるように手配させた。

ラームラルルさんがアディヤートマ・ラーママーヤナを朗読し、タクルルは聞いていらつしやる。モニも床に坐つて聞いている。

満月の如く完全なラーマは、シーターと結婚した後、アヨーディヤの都に向かった。その途中でパラシユラーマに出合った。ラーマがシヴァの大弓を壊したということ聞いたパラシユラーマは、途中で待ち伏せして道中の邪魔をしようとしたのである。ラーマの父王ダシヤラタは恐怖にかられた。パラシユラーマは一張の弓をラーマに向かつて投げつけ、それに弦を張るようにと言った。ラーマはかすかに笑つて左手でその弓を受け、弦をピーンと張った！ 矢をつがえたパラシユラーマに向かい、『さあ、どこを射たら良いのか、望みの場所を言え』と聞いた。この言葉にパラシユラーマはハツとして省みるところあり。ラーマに向かつて、御身こそ至上梵なりと讃えて礼拝した。

パラシユラーマの讃えの言葉を聞きながら、タクルルは前三昧になられた！ 時々、「ラーマ、ラーマ」とやさしい声でつぶやいていらつしやる。\*\*\*

〔訳註——ベンガル語原典には何か所か「\* \* \*」や「……」で記載された箇所があり、これはマヘンドラ・グプタが覚えて記述しなかつた内容で、一般には公開出来ない秘密の内容や、マヘンドラ・グプタへの個人的な教えのようである〕

聖ラーマクリシュナ「(ラームラルに向かつて) ちよつと、賤民グハカの話のところを読んでみる!」  
ラームラルは、<sup>ク</sup>バクタ・マーラー<sup>ク</sup>のなかの、そのくだりを読み始めた。(訳註、グハカ——非<sup>アジッチャツラ</sup>人の  
頭領の名前)

ラーマが、<sup>ク</sup>父のなした誓言<sup>ク</sup>のために森に入られることを知った頭領グハカは、心の底から驚いてしまった。

驚きのあまり声も立てられず、目からは大粒の涙が止めどなく流れた。

木で作った人形のように、しばらくは身動きもできなかつた。

やがて、ゆつくりとラーマのそばに歩みよつてこう申し上げた。——「私の住居にお越し下さい」

ラーマは彼を友と呼んで胸に抱きしめた。

グハカはラーマに身も魂も捧げる決心をした。

グハカは言う——

君はわが善き友、わが心と体を君に捧ぐ

君はわがすべて、わが命であり、財宝であり、領土だ

君はわが信仰、わが救い、わがめでたき祭式

われ、死ぬほどに君を愛す

わが体を、友なる君の足許あしもとに捧げよう

ラーマは十四年の間、森に苦行者として住んでいたが、ラーマが髪をモシヤモシヤにして木の皮を身にまとうておられると聞けば、グハカも髪をモシヤモシヤにして木の皮を身にまとい、ラーマが木の実、草の根よりほか何も口にしないと聞けば、グハカも木の実や草の根しか食べないでいた。約東の十四年を過ぎててもラーマが戻ってこないのをみて、彼は火を燃やして身を投じようとした。そのときハヌマーンが到着して、ラーマの伝言を知らせた。その知らせを聞いて、グハカは喜びの洪水に泳がなばかりであった。やがて、ラーマとシーターがプシユバカ（天の乗物）に乗って到着したのであった。（訳註プシユバカ—ブラマーが数千年の苦行を続けた富の神クベーラに与えた天の乗物で、ものすごい速さで天を駆けることができる古代の戦車。魔王ラーヴァナが奪い取ったが、ラーマがそれを取り戻した）

慈悲深く、喜びそのもの

愛そのものなるラーマは

信者の身の上を想い

いとしき信者、頭領グハカ、かれを仰ぎて

喜びに毛も逆立ち、胸熱く溶けるほどなり

二人はたがいに、しかと抱き合いて

主と僕の二つの体は

うれし涙でびっしりと濡れたり

徳高きかな、頭領グハカよ

あな目出たし あな喜ばしと

一歓喜のざわめき、この地上を覆いぬ

〔ケーシャブ・センのヤドリツチャー・ラーバ——方法——力強い離欲と世俗の放下〕

昼食の後、タクール、聖ラーマクリシュナは少しお休みになっておられる。校長がそばに坐っている。そのとき、シャーマ博士とほか数人の人が入ってきて席についた。

タクール、聖ラーマクリシュナは起き上がってお坐りになり、お話を始められた。

聖ラーマクリシュナ「仕事はどうしてもしなければならぬというものではないよ。神を体得んだら、義務は自然になくなっていく。果実が実ると花は自然に落ちる。

神をつかんだ人は、もうサンディヤーなどの定つた宗教的勤行はしなくなる。勤行は真言に吸いとられる。そうなる<sup>ガイヤトリ</sup>と真言さえとなえていけばいいんだよ。そのうち、真言はオームに吸いとられる。

そうなる<sup>ガイヤトリ</sup>と真言さえとなえる必要はなくなる。ただ、オームをとなえていけばいいんだ。勤行はいつごろまでか？ それはね、ハリの名やラーマの名を聞くと身がふるえて涙がこぼれるようになるまで

だ。金を儲けるためや、何かの事件がうまく片付くようにとお祈りする——こんなのは皆、よくないね」  
〔訳註、サンディヤー——昼と夜との接合時〓朝と夕に行う祈り。ガーヤトリー——バラモンの男子が一日に三回、定期的にくりかえずヴェータの中の聖句〕

一人の信者「世の中の人は、一人残らず金を得ようとして努力しているように見えますが——  
ケーシャブ・センでさえ、藩主ラージヤの息子に娘を嫁がせたではありませんか」

聖ラーマクリシュナ「ケーシャブは別だよ。神様の本当の信者は、アクセクしなくても神様がその人に必要なものをみな与えて下さるんだ。王様の正統な息子には、毎月充分な手当が支給される。弁護士や何かのことを言っているんじゃないよ、あの連中は苦労して、お客の奴隷になって金をかせぐ。わたしはホンモノの王子様のことを言っているのさ。ホンモノの信者は何の欲もなく金のことなど気にしないが、金は自然に入ってくる。ギターターにあるが、ヤドリツチャー・ラーバ（無理なく入ってくるもので満足し）だよ。〔訳註、ヤドリツチャー・ラーバ——バガヴァッド・ギターター4・22からの引用〕

良いバラモンは何の欲もなく、隠亡おんぼうのような賤民の家からでも食べ物を受けとるよ。ヤドリツチャー・ラーバ（無理なく入ってくるもので満足し）だよ。欲しがらるわけではないのに、物の方からやってくるんだよ」

一人の信者「よくわかりました。で、私共はどのようにしてこの世間で生活したらよろしいでしょうか？」

聖ラーマクリシュナ「泥魚のようにして暮らしたらいい。世間から離れて静かなところで一人で神

のことを考える——これを時々しているうちに、あの御方に対する信仰が生まれてくる。そうすれば、世間のことに巻き込まれずに生活できるよ。泥があつて、その泥の中で暮らさなけりやならない。だが体には泥がつかない。そういう人は、無執着の心で社会生活をしているんだよ」

タクールがふとご覧になると、モニが一心不乱になつて聞いている。タクールはモニの方を眺めながらおっしゃる。

聖ラーマクリシユナ「力強い離欲ができれば、神にふれることができるよ。強烈な離欲の精神ココロがおきた人はこう感じる——この世の中は燃えている森だと！ 火がついて燃えているんだ！ 女房や子供は深い井戸のように見える！ これほどの離欲の気持ちがおほんとうに起こつたら、その人は家を捨ててしまうよ。ただ、無執着の気持ちで世を渡る、なんてものじゃないんだ。女と金こそがマヤーなんだ。マヤーだということがわかれば、むこう様は恥ずかしがつて逃げて行く。一人の男が虎の皮をかぶつて友だちを脅かそうとした。脅かされた人はこう言つた——「私はお前を知つているよ。お前は仲間のハレじゃないか」するとハレは笑いながらあつちへ行つて、また別の人を脅かしに行つた。女というものはすべて、シャクティの権化だ。あのアディヤシャクティが女になつて、女の姿をして現れているんだよ。アディヤートマ(ラーマヤナ)にあるが——ラーマを、ナーラダたちが讃えた。「おお、ラーマよ、およそ男性なるものはすべて君である。そして、女の形をしたものはすべてシーターのおよそおえる姿だ。君はインドラ、シーターはインドラ妃、君はシヴァ、シーターはシヴァ妃、君は男、シーターは男の配偶、つまり女——全く何と言つたらよいか——男あるところに君あり、女ある

ところにシーターあり」

〔放下と運命——タクール、ヴァマチャラ修行(女と一緒に修行)を禁止〕

また、信者一同に向かつてお話しになる——

「心でそう思っただけじゃ何も捨てられない。運命(ブラーラフダ)とか前世からの力(サンスカーラ)というものがある。一人の王様にあるヨーギーが言った。——『森へ行つて、私のそばに坐つて神を瞑想しましょう』王は答えた。『タクール、あまり効果はないと思いますよ。私はいっしょに住むことはできません、私にはまだ、この世でせねばならぬ経験が残っている。森へ行つて住んだら、森に王国をつくつてしまいますよ！ 私にはまだ、苦楽の経験が残っているから——』

ナタバル・パンジャは子供のころ、この庭園(にわ)でいつも牛の世話をしていた。だが、彼にはしなくてはならぬ経験がたくさんあったんだね。だから、今ではヒマシ油の工場を経営して、大儲けをしている。アラムバザールでヒマシ油の商売をして繁昌しているよ。

ある宗派では、女の人をそばに置いて修行する。カルタバジャ派の婦人たちのところへ、わたしは一度連れて行かれたことがある。皆がわたしの近くへ来て坐るんだよ。わたしはその女たちを、母さん、母さんと呼びかけたら、『この人は初心者で、まだ心得がない！』と言つたよ。あの派では未熟なものを初心者と言うんだね。その次が修行者、それから完成者という順序になる。

一人の女がヴァイシュナヴァ・チャランのそばに行つて坐つた。ヴァイシュナヴァ・チャランに聞



いたら、『これは少女の態度をとっている！』と言っていた。

女を妻だと感じると、あつという間に墮おちる。母親と感ずることが清浄な態度だ」

カンサリパラの信者たちは立ち上がった。そして、「では、私共は失礼いたします。大実母カーリーやほかの神々にお参りしてまいります」と言った。

### 聖ラーマクリシュナと神像礼拝——熱烈さと神の体得

モニは五聖樹パンチャパテイの杜やカーリー殿のあたりを一人でそぞろ歩いている。タクールが、「もう少し修行すれば神が覚さとれるよ」とおっしゃったことについて、モニはいろいろ考えているのだろうか？

それから強烈な離欲の話。それから、「マヤーだということがわかれば、それは自然に逃げて行く？」

時間はおよそ三時半近くになった。タクール、聖ラーマクリシュナの部屋にモニはまた戻って坐つた。ブランドン学園から、一人の教師が生徒を数人連れてタクールに会いに来ていた。タクールはその人たちと話をしていたら、教師が時々質問する。神像礼拝についての話である。

聖ラーマクリシュナはその教師に向かつて——

「神像礼拝がどうしていけないの？ ヴェーダーンタで言っているが、存在と光と愛のあるところ、即ち、彼ブダツマンの顕現なり。だから、あの御方をのけてはどんなモノだって存在しないんだ。

それにほら、女の子はいつまで人形と遊んでいるかね？ 結婚して夫といっしょに暮らすようにな

るまでだ。そうになると、人形は箱のなかにしまってしまう。神を体得したら、神像を礼拝する必要なんかないだろう?」

タクールはモニの方を向かれて——「熱心になれば神はつかめる。無我夢中にならないとね。無我夢中になって熱愛したら、心のすべてがああ御方に向かつて行くよ」

〔子供の信じ方と神の体得——夫ゴーヴィンダ——ジャティラ少年〕

「ある人に娘があつた。ほんの幼いときに未亡人になってしまった(訳注——結婚式を挙げた夫が死亡した)。夫の顔も知らないうちにだよ。やがて、他の娘たちのところには夫がたずねてくるのに気がついた。この娘はある日、『お父さん、私のおムコさんはどこにいるの?』と聞いた。父親は、『ゴーヴィンダ(クリシュナの別名)がお前のおムコさんだ。あの御方を呼べば、会いにきてくださるよ』と答えた。娘は部屋に入つて戸をしめ、ゴーヴィンダを泣きながら呼んだ。こう言つてね——『ねえ、ゴーヴィンダ!来てちょうだいよ。私に会つてちょうだい。あんたはどうして来てくれないの?』——小娘のこの嘆きを聞いて、タクールは我慢が出来ず、娘に会いにきてくださったよ。

子供みたいに信じることだよ! 子供が母親に会いたがつて焦れるような、あんな焦れ方だ。この熱心さが明け方の雲の色だ。その後で太陽が昇ってくる。こうした居たたまれないほどの熱心さの後で、神は見える。

ジャティラ少年の話がある。学校へ通つていた。いつも、ある森の道を通つて学校へ通つていた。

この森の道を少年は恐がった。母親にそう言うのと、母親はこう答えた——『どうして恐いの？ お前、マドウスーダナ（クリシユナの別名——悪魔マドゥを退治した者の意）をお呼び』少年は聞いた——『マドウスーダナって誰？』母親は答えた——『マドウスーダナはお前の兄さんにあたる人だよ』そこで、一人で森の道を歩いていて恐くなったとき、『マドウスーダナ兄さん！』と呼んだ。どこにも誰もいない。こんどは声を張り上げて叫んだ。——『マドウスーダナ兄さん、どこにいるの？ 早く来て！ ボク、恐いよ』タクールは我慢ができない。出てきて、『ホラ、わたしはここにいるよ。どうしてお前は恐がったりするんだい？』こう言っついでいっしょに学校のすぐ近くの道まで送ってくれて、別れしなにこうおっしゃった。『お前が呼びさえすれば、わたしはいつでも来るよ。もう恐くないだろう？』これが子供の信じ方だ！ このまっすぐな熱心さだよ！

あるバラモンは毎日、家で神に供養をしていた。一日、どうしても用事のために外出しなければならなかった。小さな息子にこう言いつけて出た。『今日は、お前がタクールにお供えをしなさい。タクールが召し上がるようにね』その子はタクールにお供えをした。けれどもタクールは黙って坐つていらつしやる。話もしなければ食べもしない！ 子供は長いことそこに坐つて待っていたが、いつまでたつてもタクールは動こうともしない！ 子供は、タクールが食べ物のところにきてお坐りになつて召し上がるものだと思ひ込んでいたのだった。それで子供は、何度も催促しはじめた。『タクール、ここへ来て食べてよ。もうずいぶん遅くなったよ。もうボクは坐つていられないよ』タクールは何もおっしゃらない。子供はどうとう泣き出した。こう言いながら泣きじゃくつた。——『タクール、お

父さんが僕に、「タクールに食べさせなさい」と言ってお出掛けなんだよ。どうしてここへ下りてこないの？ どうして僕のそばへ来て食べないの？」焦れに焦れてしばらくの間泣いていたら、タクールは笑いながら祭壇から下りてきて、食事の席に坐って食べはじめた！ タクールに給仕をして礼拝室から出てくると家の人たちが、『お供えがすんだら、皆下ろして持っておいで』と言った。子供が、『ああ、すんだよ。タクールはみんな召し上がったよ』と答えた。家の人たちは、『そんなバカなことが！』子供はケロリとして、『どうして？ タクールはみんな召し上がったよ！』みんなは礼拝所へ駆けつけて、見て驚いたの何の！』

夕方にはまだ間があった。タクール、聖ラーマクリシュナは音楽塔の南側に立ってモニと話をしている。目の前にガンジスの流れ。寒い季節なので、タクールは暖かい服を着ていらつしやる。聖ラーマクリシュナ「五聖樹の杜の小屋で寝るかい？」

モニ「音楽塔の二階の部屋を貸していただけじゃないでしょうか？」

タクールは管理人にモニの意を伝えて、その部屋を借りるようにして下さるだろう。モニは音楽塔の二階の部屋が気に入っていたのだ。彼は詩人なのだ。その部屋からは、空やガンガーや月や花咲く木など美しいものが皆、眺められるのである。

聖ラーマクリシュナ「そりゃ借りられるとも。けど、五聖樹の杜の小屋は、沢山ハリの名を称えたり神を想った場所だから、それで言ってみただけさ」

人生の目的 (End of Life) —— 神を愛す

タクール、聖ラーマクリシュナの部屋には香が焚かれていた。小ベッドの上にお坐りになったタクールは、神を想っていらつしやる。モニは床に坐っていた。ラカール、ラトウ、ラームラルたちも部屋の中にいた。

タクールがモニにおつしやったことはこうである——「即ち、あの御方を信仰せよ。あの御方を愛せよ」と。やがてタクールは、ラームラルに歌をうたうようにとおつしやった。ラームラルは美しい声でうたった。タクールはいちいち歌を指示された。

タクールのご命令通り、ラームラルは先ずはじめに、聖ガウランガの出家の歌をうたった。

ああ何という光景を見たことか——

師ケーシャブ・バーラテイの庵のなかで

聖ガウランガは不思議な光につつまれて

神の慈悲のよろこびに

あふれる涙は百筋の川になって流れん

ガウランガは狂った象のように

ケーシャブ・バーラテイ——聖ガウランガ(聖  
チャイタニヤ)の師匠

愛に酔いしれて踊り歌い

地にころげまわり、涙の川で泳ぎ

泣きながらハリの名を呼ぶその声は

ライオンの雄叫びおたけのように

天と地にひびきわたった

そして菌にわら草をくわえ

頭を低く手を合わせて

頭に巻き毛、ヨーギーの衣をまとい

神しちべの僕となつて家々の戸かどに立ち

救いの道を語り歌つた――

信仰と愛に泣き、命を燃やして

人びとの悲しみをわが悲しみとし

一切を捨てて神の愛のなかに住み

プレーマダースは聖チャイタニヤの御足しちべに僕となつて

門口から門口へと語り歩いた

ラームラルは次に、サチーは泣いてニマイと呼ぶ、君なしにはどうして生きていかれよう、を歌った。タクルはそれから、次の歌をうたうようにとおっしゃった。

一、解脱がほしいと言うのなら

わたし(クリシュナ)は気軽に与えもするが

.....

一八八三年六月二日に全訳あり

二、ラーダーを見ること 誰でもできるか

ラーダーの愛を 誰でも持てるか

尊く珍しい その宝

祈りがなくては獲られない

修行がなくては手に入らない

それは天秤宮の新月の

スワティー星座からふる雨か

ボルシヤの雨も雨なれど

ボルシヤ——雨期(六月中旬〜八月中旬)

若い女がおさな子抱いて

お月さま取るか腕のばす

子供はそれにだまされて

取れるものだと思ひこむ

空を破つてこの地面から

お月さま昇つていったのか？

三、新しく湧き出づる雲間に

さし昇るクリシュナの月か

.....

一八八三年四月八日に全訳あり

タクルルはラームラルルに向かって、「あれ、あの歌をうたつておくれ——ガウルとニタイ、君たち二人の兄弟は『を』（訳註、ガウルとニタイ——チャイタニヤとニティヤーナンダ）ラームラルルといっしょに、タクルルも声を合わせて歌つて下すつた。

ガウルとニタイ、君たち二人の兄弟は

こよなく慈悲深いお人と聞く（おお、主よ）



私はそれを聞いてここへ来た(おお、主よ)

私がカーシーの都(ベナレス)に行ったとき

カーシーの主ヴィシユヴェーシユヴァアラ(シヴァ)から

かの至上梵パラブラフマンがサチーの家に生まれたとのお告げを賜たまわり

(おお、私は見知った、あなたが至上梵であることを)

私は多くの場所をめぐったが

これほどの慈悲を見たことがない(君たちのような——)

君たちはかつてヴラジャ(訳註)に生まれたカナイとバライ

今、ナディアに生まれてガウルとニタイ(昔の姿をかくして)

ヴラジャの野ではかけっこ遊びしたが

今はナディアの土ほこりのなかで転がり回る(ハリの名唱え 愛に酔い)

ヴラジャのあそびは、笑い、叫び、ふざけ

今日、ナディアのあそびは、唯ただハリの名を呼ぶ(おお、わが命のガウルよ)

君は体の色や形、すべて蔽かくしおおせるが

ただ、二つの目の形だけはそのままで(おお、慈悲深きガウルよ)

堕ち沈んだ者も、君の名を聞いて浮かび上がり

心は大きな希望でふくれてくる(おお、罪業浄化の君よ)

ヴィシユヴェーシユヴァアラ——すべてのもの

のの主の意味でシヴァ神のこと

サチー——チャイタニヤの母親の名

私も大きな希のぞみを持ってここへ来た

どうぞ君の足もとによせておくれ（おお、慈悲深きガウルよ）

（訳註3） ジャガイとマダーイを救ってくれた主よ

私をも同じように救っておくれ（おお、低きを高める救い主よ）

君は賤民も区別なく胸に抱く

ッハリボロ（神の名唱えよ）と呼んですべての人を抱く！（おお、無上の行為、おお、貧しき者の主よ）

〔タクール、聖ラーマクリシュナの信者、神を求めて一人で修サダナ行〕

音楽塔ナハバトの二階の部屋でモニは一人で坐っている。夜更けである。今日はオグロハヨンの満月――

空も、ガンガも、カーリー殿も、ほかの寺堂も、境内の道も、五聖樹パンチャパテイの柱も、惜しみなく注ぐ月

光の中に浮かび泳いでいるようだ！ モニは一人で、タクール、聖ラーマクリシュナのことを想っ

（訳註1） カナイとバライ――クリシュナと兄のバララマ。つまり、チャイタニヤ兄弟はクリシュナ兄弟の生まれ更わりであるとみる。

（訳註2） ヴラジャで、カナイとバライは暗青色シヤムの肌色だったが、今、ナデアア（ナバドウィープ、チャイタニヤの生誕地）のゴイルとニタイはちがう肌色である。しかし、目の形だけはカナイとバライそのままだ。

（訳註3） ジャガイとマダーイの兄弟はニタイに傷を負わせたが、ニタイはそれを許し、二人の兄弟は自分たちの非を認めゴイルとニタイの信者となり、後には聖者となった。

ていた。

真夜中の三時ころ、彼は立ち上がった。そして、北、五聖樹パンチャパティの杜に向かつて歩いて行つた。タクール、聖ラーマクリシュナが五聖樹パンチャパティの杜のことをおっしゃつた。彼はもう音楽塔の二階などどうでもよかつた。彼は五聖樹の杜にある小屋に泊まろうと固く決心した。

あたりはシーンとしている。夜の十一時ころ、満潮の水が上がつてきていたので、時折、水音が聞こえてくる。彼は五聖樹の杜の方へ進んでいる！ 遠くの方から何か音が聞こえてくるようだ。誰かが五聖樹の杜の茂みの中から叫び声をあげて呼んでいるような音だ——「マドウスーダナさん、どこにいるの！」

今日は満月だ。月の光はバニヤン樹の厚い木立ちの枝の間からも差し込んでくる。

更に進み続ける。五聖樹の杜のなかで、タクールの信者が一人で坐っているのが遠くの方から見えた！ あの人も静かな処に一人で坐つて、呼び続けているのだ。（訳註）マドウスーダナさんはどこにいる！と。モニは黙つてその姿を眺めていた。（訳註）神を探している、ということ